

作業領域における付加構造・等位接続構造の生成*

中島崇法

1. 序

現在の極小主義統辞論では、従位接続 (subordination)、付加 (adjunction)、等位接続 (coordination) はそれぞれ併合 (Merge)、対併合 (Pair-Merge, Chomsky 2004)、シークエンス形成 (Form Sequence, Chomsky 2021) によって得られるとされる。しかし、併合以外の構造構築操作を認めることは、UG を複雑化させるという点で好ましくない。本稿では、等位接続構造を併合のみによって扱うことでこれらの構造の統一化を目指す。

2. 非対称的併合

Chomsky (2021) によれば、併合は作業領域 (workspace, WS) から作業領域への写像として定義される。この枠組みを用いて、Nakashima (2022)、中島 (2024) は(1)の作業領域から P, Q の併合によって(2)の4通りの作業領域が得られると提案した。

- (1) $WS = [P, Q]$
(2) a. $WS = [\{P, Q\}]$ b. $WS = [\{\bar{P}, Q\}, P]$
 c. $WS = [\{P, \bar{Q}\}, Q]$ d. $WS = [\{\bar{P}, \bar{Q}\}, P, Q]$

Nakashima (2022)、中島 (2024)によれば、付加構造は(2b, c)の併合 (非対称的併合、Asymmetric Merge) によって導入される。そして、作業領域に残された要素は C 統御をつうじて構造内の同一のコピーを保護 (protect) するため、それらの内部への統辞操作が禁じられる (保護された領域を網掛けで表す)。

3. 併合と等位接続構造

本稿は、等位接続構造は(2d)のタイプの併合 (相互非対称的併合: Mutual Asymmetric Merge) によって導入されると提案する。たとえば(3)の等位接続構造は、(4a)の作業領域を(4b)へと写像し、等位接続詞 and を(4c)のように導入することによって得られる。

- (3) Mary [_{VP1} loves John] and [_{VP2} hates Bill]
(4) a. $WS = [VP_1, VP_2]$
 b. $WS' = [\{VP_1, VP_2\}, VP_1, VP_2]$
 c. $WS'' = [\{and, \{\bar{VP}_1, \bar{VP}_2\}\}, VP_1, VP_2]$

このとき(4c)では、作業領域内に残された VP_1, VP_2 が、構造 $\{and, \{\bar{VP}_1, \bar{VP}_2\}\}$ 内の VP_1, VP_2 を保護するため、 VP_1, VP_2 およびそれらの内部へ統辞操作の適用が禁じられる。この帰結のひとつが、等位項の内部からの抽出を禁じる等位接続制約 (Coordination Structure Constraint) である。具体例として、(5)を考えよう。

- (5) *Who does Mary [_{love t}] and [_{hate Bill}]?
本稿の提案によれば、(5a)には(6)の作業領域が与えられる。

- (6) $WS = [\{and, \{\bar{VP}_1 \text{ love who}, \bar{VP}_2 \text{ hate Bill}\}\}, VP_1, VP_2]$

ここで、等位接続構造内の VP_1, VP_2 は作業領域内の VP_1, VP_2 によって保護されているため、それらの内部にある wh 句の抽出が禁じられる。

本稿の提案はさらに、等位項間の C 統御関係 (およびその欠如) を説明することができる。まず(7)に示すように、第一等位項の要素は第二等位項内の要素を量化詞束縛することができる。

- (7) Every man_i and his_i dog went for a walk. (Munn 1993:16)

一方、第二等位項内の要素は、第一等位項からの束縛条件 C 違反を回避することができる。

- (8) John_i and John_i's wife are certainly invited. (Progovac 1998: 3)

こうした一見矛盾した事実は、(7)と(8)がそれぞれ(9a)と(9b)の作業領域をもつことから説明される。

- (9) a. $WS = [\{and, \{DP_{1a} \text{ every man}\}, \{DP_{2a} \text{ his dog}\}\}, \{DP_{1b} \text{ every man}\}, \{DP_{2b} \text{ his dog}\}]$
 b. $WS = [\{and, \{DP_{1a} \text{ John}\}, \{DP_{2a} \text{ John's wife}\}\}, \{DP_{1b} \text{ John}\}_1, \{DP_{2b} \text{ John's wife}\}]$

(9a)において被束縛要素 his dog は、等位接続構造内に DP_{2a} としてひとつ、作業領域内に DP_{2b} としてもうひとつコピーをもつ。束縛解釈は解釈部門でのコピーの解釈位置において与えられると仮定すると、(9a)において太字の DP_{2a} の位置で his dog を解釈した場合、his dog は等位接続構造内の every man から C 統御を受け、束縛解釈を得ることができる。一方、(9b)において John's wife は DP_{2a} と DP_{2b} の位置にコピーを有しているが、太

字の DP_{2b} の位置で解釈を与えると、等位接続構造内の John からの C 統御および束縛条件 C の違反を回避することができる。

最後に本稿の提案は、併合の二項性 (binarity) から等位接続される要素の数もちょうど2つでなければならぬと予測する。(10)をみよう。

- (10) Hobbs and Rhodes and Barnes lifted the rock. (Borsley 2005: 468)
- a. Hobbs and Rhodes and Barnes each lifted the rock.
 - b. Hobbs and Rhodes lifted the rock together and Barnes lifted it on his own.
 - c. Hobbs lifted the rock on his own and Rhodes and Barnes lifted it together.
 - d. Hobbs and Rhodes and Barnes lifted the rock together.

(10)の文は(10a-d)の解釈をもちうる。これらの解釈は、2つの要素を再帰的に等位接続した(11)の構造から与えられる。

- (11) a. {and, {{and {Hobbs, Rhodes}}, Barnes}} lifted a piano.
b. {and, {Hobbs, {and {Rhodes, Barnes}}}} lifted a piano.

(11a)において、等位接続された{Hobbs, Rhodes}と Barnes とでイベントを分配すると(10b)の解釈が与えられる(さらに Hobbs と Rhodes とでもイベントを分配すると(10a)の分配読み (distributive reading) が得られる)。同様に(11b)において、等位接続された Hobbs と {Rhodes, Barnes} とでイベントを分配すると、(10c)の解釈が与えられる。イベントの分配をおこなわない場合、(10d)の集合読み (collective reading) 解釈が与えられる。

一方、3つ以上の要素を等位接続する場合、分配読みと集合読みのみが可能である。

- (12) Hobbs, Rhodes, and Barnes lifted the rock. (ibid.: 468)
- a. Hobbs and Rhodes and Barnes each lifted the rock.
 - b. * Hobbs and Rhodes lifted the rock together and Barnes lifted it on his own.
 - c. * Hobbs lifted the rock on his own and Rhodes and Barnes lifted it together.
 - d. Hobbs and Rhodes and Barnes lifted the rock together.

本稿は、3つ以上の要素が等位接続されたものは構造化されない等位接続 (unstructured coordination) として分析する。特に、Ott (2022)に従い、構造化されない等位接続は談話部門において複数の文に省略を施した構造から得られると仮定する。これによれば、(12)の文には(13)の構造が与えられる。

- (13) a. Hobbs ~~lifted the rock~~. Rhodes ~~lifted the rock~~. Barnes lifted the rock.
b. Hobbs ~~lifted the rock~~. Rhodes ~~lifted the rock~~. Barnes ~~lifted the rock~~. They lifted the rock.

分配読みは(12a)によって与えられる。(12b)では Hobbs, Rhodes, Barnes を指す they が省略されており、これにより集合読みが与えられる。

4. 結語

本稿では、Chomsky (2001)の作業領域および Nakashima (2021), 中島 (2024)の非対称的併合を用いて、等位接続制約、等位項間の C 統御、分配読みと集合読みの利用可能性に説明を与えた。本稿の分析が正しい限りにおいて、併合以外の構造操作を UG に仮定する必要はない可能性が示唆される。

参考文献

- Borsley, Robert (2005) "Against ConjP," *Lingua* 115, 461-82. / Chomsky, Noam. (2004) *Beyond Explanatory Adequacy. Structures and beyond*, ed. by Adriana Belletti, 104-131. Oxford: Oxford University Press. / Chomsky, Noam (2021) "Minimalism: Where Are We Now, and Where Can We Hope to Go," *Gengo Kenkyu* 160, 1-41. / Munn, Alan Boag (1993) *Topics in the Syntax and Semantics of Coordinate Structures*, Doctoral Dissertation, The University of Maryland. / Nakashima, Takanori (2022) "How to Generate Adjuncts by MERGE," *Proceedings of NELS 52: Volume 2*, 251-260. / 中島崇法 (2024) 「併合とボックス理論に基づく項と付加詞の非対称性の分析」『弘前大学人文社会科学論叢 人文科学篇』 / Ott, Dennis (2022) "Unbounded Sequences as Paratactic Configurations," *Proceedings of NELS 52*, 275-284. / Progovac, Ljiljana (1998) "Structure for Coordination, Part I," *Glott International* 3, 3-9.

* 本稿の内容を発展させた論文が、石井透、後藤亘、小町将之、宗像孝 (編) 『極小主義における説明理論の挑戦 (仮)』 開拓社に掲載される予定である。